

3つのコースが入り交じる学科の強みを際立たせるために 教員が連携しながら議論を重ねた日々

2006年に人間環境デザイン学科が創設されてから10年。創設当初から教鞭を執る内田祥士先生と川内美彦先生、柏樹 良先生の3名が集まり、人間環境デザイン学科の「これまで」と「これから」について語り合った。

各コースの違いを知り共通項を探し出す

—— まず、人間環境デザイン学科が創設された2006年当時の「ユニバーサルデザイン」にまつわる状況を教えてください。

川内 ユニバーサルデザインが日本に知られ始めたのは、1990年代中頃の頃のこと。海外では障害のある当事者や研究者やデザイナーから広まった概念ですが、日本は行政が中心となって取り組んできたのが特徴です。そのため、まず建築や道路などハードの整備や改善から始まりました。国土交通省が「ユニバーサルデザイン政策大綱」をとりまとめたのが2005年。人間環境デザイン学科がスタートしたのは、その翌年です。「ユニバーサルデザイン」を学科の柱として掲げたのは日本で初めてだったと思います。先進的な学科として注目が集まりましたね。

ユニバーサルデザインという言葉は、だいぶ社会に浸透してきたように思いますが、実はユニバーサルデザインについて世論調査をすると、まだまだ十分に知られているというわけではありません。障害のある人にはかなり知られているんですけどね。一般市民にまでは広まっていないのが現状です。

柏樹 私は、2008年から教員として働き始めました。実は、専任の教員に応募するとき、ものすごく悩んだんです。背中を押したの

は、横断的なデザインの分野を1つの学科にすることに可能性を感じたから。挑戦してみようと思いました。

内田 人間環境デザイン学科は、学部くらい幅広い。教員も、建築家や都市計画の専門家もいれば、支援器具を作る人やプロダクトデザイナーもいますからね。

川内 そもそも「ユニバーサルデザイン」という単体のデザインはありませんからね。さまざまなデザインの中にユニバーサルデザインのテイストが入っていくものなので、いろんな分野の先生がいるのが自然なんです。

学生は、1、2年生のとき「空間デザイン」「生活環境デザイン」「プロダクトデザイン」の3分野を均等に学んで、3年生から専門に入る。例えば、最初から「空間デザイン」に進もうと決めている学生も「プロダクトデザイン」についても学ぶわけです。教員側から言えば、自分の分野に関心のない学生にも教えることになる。それもかなり新しい試みでしたね。

内田 私もプロダクトデザインを目指す人に建築を教えるのは、生まれて初めての経験でした。

柏樹 伝えたいことを理解してもらうために、私はこれまで学んできたメソッドを1回壊して考え直しました。この学科の教員は多かれ少なかれ、みんなやっていることじゃないですか。

内田 大変な努力をしていますね(笑)。

川内 議論の場がたくさんあるんですよ。新学期が始まる前に丸1日かけて開催する「デザイン会議」もその1つ。この会議は、非常勤の先生も参加してもらって、昨年度の反省を共有し、今年度の方針を決めています。授業や学生のことについて議論す

教員によって評価軸が違う。

予定調和ではなく統一できないことが

実は健康的なことだと思う。

—— 内田祥士



る「教室会議」という会議も週1で開いていますからね。意思疎通する時間がたくさんあるので、教員同士も仲良くなる。風通しの良さは、この学科の特徴だと思います。

柏樹 3年生になるまでに教えておきたいことは、各コースごとたくさんありますよね。だけど、時間は限られているので、各コースの教員は連携を図り、合理的に教える方法を議論する必要があるんですよ。各コースの先生が教える1、2年生の基礎科目にどれだけの価値がつけられるかが重要になるという。

内田 最初の頃は、私も含めて「自分の専門をたくさん教えたい」と躍起になっていましたね(笑)。しかし、そうするとジャンルを横断して学べるのが強みにならないことに気づいた。それで、教員同士がお互いを理解するためにも、今まで以上に議論するようになったんです。

例えば、建築では簡易的な模型を作りますよね。サイズも小さいものです。その一方で、例えば自助具をデザインするときは、人間が本気で力をいれたとき、どういう風に壊れるかを知る必要がある。だから模型は原寸大で作り、材料もリアルじゃないとダメ。要するにジャンルによって「模型」の作り方も考え方も全く違うんです。それを踏まえて、学生たちに何をどう作らせるか話し合う。そうやってお互いの違いを理解するようになると、議論がだんだん面白くなってくるんです。

矛盾は社会では当たり前という考え

柏樹 この10年、デザインについて教える「本質論」を探っていたとも言えますね。

内田 ユニバーサルデザインだからエレベーターをつける、と教えるのと、学生が作った模型を川内先生が「この場所には私はどうやって行くんですか」と聞いて、学生が自ら「エレベーターが必要だった」と気づくのでは、学びの深度が違いますよね。その学生は社会に出て建築の仕事をする中で、きつとどこかで思い出すはず。そうした学びが武器になると確信できるまで、私は時間がかかりました。

柏樹 マーケットの違いについては、実は今でも悩んでいます。例

えば、川内先生が作るものは対象となる人がいますよね。リクエストを聞いて、なおかつ観察もして、その人のための道具を作るとというのが基本です。住宅は、施主がいますよね。それに対して、プロダクトの場合は、誰が買ってくれるか分かっていません。ユーザーの財布を開かせるところからスタートします。不特定多数の対象者に向けた魅力の作り方は、ターゲットが明確なものとは違いますよね。

川内 一品生産か大量生産か、ですね。

内田 大量生産について教えるプロダクトデザイナーの柏樹先生が建築コースの学生の作品を見るときは視点は、建築家の私とは違うはずです。だけど、それがいいんですよ。そもそも評価軸を統一できない。予定調和ではなく統一できないことが健康的なんだとも思います。

川内 そうそう。先生によって評価軸は違いますよね。高校生のときは答えのある問題を解いてきたので、「なんで先生によって言うことが違うんだろう」と生徒は混乱する。だけど「立ち位置によって見え方が違うのは社会では当たり前だ」という前提でこの学科は進んでいますからね。そんな学科、なかなかないと思います。

コースの人数を均等に分けて 目に見えて変化した作品の精度

内田 4年前、3年生になって分かれる各コースの定員を3分野とも同じにしましたよね。それまでは建築は策定ベースで90名、それ以外は45名ずつ。

川内 その学生たちが今年卒業ですね。

内田 確実に学生の意識が変わりましたよね。

柏樹 今年の卒業制作を見て、私も感じました。まだちゃんと咀嚼できていませんが、何かが変わった。

川内 私もそう思いました。明らかに変わりましたね。

内田 これまで学生は漠然と「最後は建築に行けばいいや」って思っていたはずなんです。だけど、各コース3等分にしたことで、将来についてより真剣に考えるようになったのかもかもしれませんね。3つの分野が均等に見えただだと思います。



Yoshihiko
Kawauchi

Yoshio
Uchida

Ryo
Kashiwagi



スロープも壁や柱と同じように「あるもの」として	
プラスにデザインできたら、	
初めてユニバーサルデザインが定着するはず。	
——	川内美彦

柏樹 卒業制作の講評会が、これほど楽しかったことはなかった。クオリティが上がりましたよね。我々が望んでいることと学生のアウトプットが近づいている印象があります。

内田 私たち教員が自分の専門分野以外の作品を見るときの視線が豊かになったとも言えると思います。

川内 先生も成長したんですね(笑)。

内田 たしかに、違う分野の作品を見たとき「こういうことが言いたいんだな」と考えられるようになりました。

柏樹 あと大きなエポックと言えば、デッサンやスケッチの授業を減らしたことがありましたよね。私はデッサンやスケッチで教育を受けてきた立場だから、思考の道具としてもプレゼンでも重要なんです。ただ、デジタルネイティブの学生がCGを使うことと僕らが鉛筆を使うことは、もしかしたら同じことなのかもしれない。

確かにデッサンは、描写力や観察力、忍耐力が鍛えられる。だけど、それらをデッサン以外の他のことで補えるかもしれない。デッサンが絵を描く道具であるなら、ITでも構わないのではないか。このことも、ものすごく議論しましたよね。

川内 かつては夏休みにデッサンの講習会もしていましたね。

柏樹 授業の中でスケッチの割合を減らし、希望者だけが表現の講習として受けられるように変えました。

内田 私から見ると、デッサンの授業は多いと感じていました。建築ではあまりやらないですからね。ただ、デッサンできる人が建築コースに来るのは面白いですよ。

柏樹 あと、建築学科は模写の問題がありましたね。

内田 そうだ、模写の授業はやめたんだ。

柏樹 プロダクトはスケッチ、建築は模写の授業を減らす。その上で「こうやって教えたら、スケッチや模写で教えたかったことを同時に伝えられるのではないかと議論しながら共通項を模索しましたね。

自分たちの常識は多数の偏見

相対化する力を養う

—— ジャンルを横断して学ぶことのメリット、他大学との違いは。

川内 授業に障害のある人を呼び、その人たちに作品の講評をしてもらっている先生がいます。日頃からコミュニケーションをとっているのです。生徒たちは障害のある人たちと普通に接することができます。卒業研究のテーマで障害や高齢問題を扱う生徒も多いんですね。相談に来る生徒には、直接、障害のある人たちに話を聞きに行きなさい、と教えている。それは他大学との違いだと思います。

柏樹 盲導犬との接し方とか、学生は自然と身につけていますね。

川内 昨年の卒業制作で盲導犬のための靴をデザインした生徒がいましたね。夏はアスファルトが熱くなるので、外を歩く犬の肉球を守るために考えたものでした。

内田 私はもともと工学部で建築を教えていました。そのときは、スロープの勾配は10分の1でも12分の1でも変わらないだろう、と思っていたんです。だけど、この学科で教えるようになって、それは偏見だと分かった。学生も自分たちが常識だと思っていることは多数の偏見に過ぎなくて、必ずしも正しいわけではない、ということが分かっている。学生たちは相対化する力が養われていると思います。

ただし、相対化する力が大きいからといって作る力が優れているとは言い切れない。何かを作る上で偏見も必要ですからね。だから、何かを発見するたび、何かが壊れている。あと、いろいろな障害を持つ人が授業にお見えになることで、「考えていなかった」と言えるようになったのも大きいですね。

川内 そうですね。今回の卒業制作でも背の高い作品があり、ボタンをタッチすると作動するものでした。ただ、そのボタンは、車いすに乗っている私の手には届かない場所にあったんです。それで私は作品を作った生徒に「私はどうやって使うの?」と聞いたら、私の手が届かないことにすぐに気づき、素直に「考えていなかった」と言ったんです。もし、同じことが社会の中で起きたとき、道行く人に私が「どうやって使うんですか」と聞いたら、きっと質問の意味が分からないと思います。

柏樹 卒業制作は、優しさを感じるものが多いですね。その傾向は、10年間で熟成してきたように感じます。その一方で、押しの弱さも感じる。表裏一体なのですが、強く押し出せないことはウィー



造形に代わる価値を見つけ出したい。	
私たちはその答えに	
最も近い場所にいるのかもしれない。	
——	柏樹 良

クポイントになりかねない。

川内 いろんな先生に見てもらうので、自分がいいと思っても「これは使えない」などと言われることも少なくない。へこむことも多いはずですが、だから、とんがったデザインが生まれにくいのかもかもしれません。学科の目標の1つは、今までになかった要素を取り込んで新しいものを作り出すことです。例えば、建築の現場では、壁や柱は構造上、必要なものとして前向きに捉えられていますよね。必要だからそれらを取り込んで、いかに美しく見せるか、独特の雰囲気を作るか、建築家は真剣に考えています。

その一方で、スロープはいまだに「邪魔者」だと思われる。建物の入り口にスロープを付けると見栄えが悪くなると感じている人は少なくない。壁や柱と同じように「あるもの」として初めからプラスに考えていこうという発想は、まだうまくいっていません。それができるようになると、初めてユニバーサルデザインが定着するはず。まだ、そこに行き着いた学生はいませんが、スタートラインには立っていると思います。

柏樹 バリアフリーなのかユニバーサルデザインなのか、という議論もありますね。課題の出し方でも作品の傾向も変わると思います。一昨年は、「2020年の東京の問題点をどう解決するか」というテーマで、妊婦や子育て中の女性、外国人、目の見えない方、車いすの方、耳が聞こえない方を各2人授業にお呼びして、学生たちにインタビューさせました。手話通訳も入れて話を聞いたんですよ。学生たちはたくさんの情報を得て、見事に昇華させていたのが印象的です。内面の発露になりがちなデザイン業界において、謙虚に物事を考えられる人材は貴重だと思います。

川内 校舎のある朝霞の雰囲気と通じるものがありますね。

柏樹 朝霞台の駅前で学生がお年寄りに手を貸して、一緒に横断歩道を渡っている。珍しい光景じゃないですね。

内田 志願者も徐々にですが確実に増えているし、就職率も伸びているんですね。人間環境デザイン学科に対する社会的認知度は進んでいると思います。例えば、高齢化の問題を理解していることは面接すれば分かる。だから就職できるんです。

—— 最後に今後の展望についてお聞かせください。

柏樹 モダンデザインの根幹は造形です。デザイン教育も、パウ

ハウスのカリキュラムや考え方がベースになっています。ただ、ポストモダンが提唱され、21世紀にもなったのに、いまだに唯一無二の価値が造形であると思われる。総合大学のデザイン学科だからこそ、造形に代わる価値を見つけ出し、置き換えていかなければと思っています。ひょっとしたら私たちはその答えに最も近い場所にいるのかもしれない、という淡い期待もあるんです。もちろん、簡単に見つかることではないし、その果実に到達できるかも分からない。だけど、根幹に近い部分にいながら、学生たちと共有できる日を望んでいます。

川内 私は、学生に「人間の多様性」をもっと伝えていきたい。関心があることは「見えているけど見えにくい」とか「車いすを使うほどじゃないけど歩きにくい」といった方々の感じ方です。

ただ、当事者の方々は語りたがらない傾向があるので分からないことも多い。そうした内面的な違いに対して、色々な引きだしを持った学生たちが、どう解決していくか考えていきたい。教員生活も残り少ないのですが、できる限りのことはやっていきたいと思っています。

内田 工学部で建築を教えているときは、建築の寿命や耐久性は工学的に分析していました。そこで暮らす人とは関係なく考えます。だけど、建物を建てたり壊したりする理由は、圧倒的に人間のライフサイクルと関連しているんです。親が亡くなって相続するとか、結婚して家を建てるとか、子供が生まれるとかね。

人間の「ライフ」が工学的で物質的な寿命を決めてしまっているわけです。建物の即物的な性能であるはずの寿命を、人間のライフデザインで決めてしまっている。この課題は人間環境デザイン学科で教えていなかったら考えることはなかったと思います。

川内 大量生産には大量廃棄はついてまわるし、流行もある。ただし、人が必要なものだけを生産して生活していたら、今のような生活レベルは保てないという問題もありますよね。

内田 逆に、工学的な考え方だけだと、そういう議論にもなりにくい。コンクリートの耐久年数は、自分たちの「ライフ」と無関係なので、単なる推定値になってしまう。だけど、それだと救いがないですよ。すべての問題において私たちはインサイダーなんです。この感覚は、人間環境デザイン学科で学んだことの1つです。